進化論考

大　津　真　作

牛はなんのために角を使うかではなく，どのようにして角を持つようになったが問題となろう。
ゲーテ

進化論とファンダメンタリズムの前史

現代の市民社会において，進化論という生物学的学説が政治的ヘゲモニー戦の重要な賭金となっている，珍しい国がある。米合州国[1]である。このことは，大統領選挙の結果から，再度，明らかになった。というのも進化論を否定する教育を系統的に行なってきた，新教をかかげてはいるが，旧態依然たる原理主義的閉鎖性を持つ，米国のキリスト教宗派は，国の運命および世界の運命を賭けた2004年大統領選挙で，ブッシュの強力な支持基盤となったからである。

ブッシュがボーン・アゲイン（Born-Again）という，終末論的なキリスト教原理主義団体に属し，神の名のもとに，ダーウィンの進化論を激しく攻撃しつづけていることは，よく知られている[2]。なにに再度生まれ変わるのか（Born-Again）は明白である。新約聖書のみならず旧約聖書の記述をまさしく一字一句，神の言葉として盲信するファナティックなクリスチャンとして再生するのである。

ボーン・アゲインは，元来は，ヨハネによる福音書，第三章のイエスとニコデモの逸話から来ている。イエスは，パリサイ派の議員ニコデモに次のように言ったという。

「はっきり言っておく。人は，新たに生まれなければ（Born-Again），神の国を見ることはできない。」

この聖書の章句を「流行らせた」のが，ブッシュお抱えの説教師，ビリー・グレアム（1918年生）である。このキリスト者としての再生（Born-Again）は，なにも個人レベルの救済にとどまらない。米国を新たなるエルサレムとして，神の王国の首都として，世界を生まれ変わらせる（Born-Again），という強烈な終末意識および合州国中心主義にもとづく世界再生の思想でもあった。それは，米合州国の軍事力を背景とした世界再編のイデオロギーと容易に結びついた。

1980年の大統領選挙において，ブッシュと同じ共和党の大統領候補だったレーガンは，「宗教右翼」ないし「クリスチャン・ライト」などと呼称されるキリスト教原理主義団体に支持を求めた。呼びかけに応じたこの宗教勢力のなかには，実にさまざまな宗旨の，ほとんどカルト教団に近いキリスト教団体が多数含まれていた――もちろんこれらは，金銭万能社会の裏面たる，公教育における科学教育軽視と無知蒙昧主義の産物であり，マルクスの言う，商人，職人，労働者等々としての社会的個人が景気循環型の資本主義経済という「偶然性」に翻弄されることから来る大小さまざまな不安と不幸の産物でもある。アフロ=アメリカンとカトリックとの混合から生まれた，玄妙な聖霊の働きを信仰するペンテコステ派（聖霊降臨の主日派），従来からのルター派，長老派，モルモン教徒，それにメシア主義的ユダヤ教徒，メソジスト原理派，バプティスト，カトリック保守派などが異教徒，堕胎支持者，フェミニスト，ゲイ，レスビアン，進化論者こそ悪の根源だとして，彼らを打倒するために，レーガンを支持した。

米合州国社会で，こうした宗教右翼が生まれたのは，1920年代に遡り，まぎれもなく，ダーウィンの進化論をめぐる論争のなかからであった。しかし，その遠い祖先は，すでに，ダーウィンの『種の起原』刊行時にまで遡る。

『種の起原』が1859年に刊行されて以来，米国の宗教界は，現在の多様な生物からなる自然界の秩序は，神によって定められた静的秩序ではなく，自然淘汰にもとづく進化の結果である，との進化論に対して，どのように対応するのかをめぐって，自由派と保守派に分裂した。自由派が教義のなかに進化論を神の秩序と恩

恵の現われとして，改変しながら受容したのに対して（米国版テイヤール・ド・シャルダンは，すでにこの頃に活躍していたのである!），1880年代に析出してきた保守派は，キリスト教原理主義（Fundamentalism）を唱え，ダーウィンの進化論を一切否定し，イエス・キリストの身体的再降臨，処女懐胎，復活，キリストの贖罪の教義を再確認するとともに，聖書の字義通りの絶対的な読解を信仰の土台（Fundamental）とした。こうした考えを持った，一部のバプティストや長老派が1876年から，ナイヤガラの滝に毎年集結し，自分たちの教義の土台を確認しあうようになり，20世紀の初頭には，原理主義の教典とも言うべき『原理，真実への証言』*The Fundamentals.A Testimony to the Truth,* edit.,by R.A.Torrey, A.C.Dixon and Others, 1917, (Reprinted,1972 by Baker Book House)が代表的神学者たちによって，まとめられた。ここには，明確に，進化論の否定が創世記解釈とともに記されている。そして，最後に，直接的な神的行為による人間の創造である。最後であって，最初ではない。

原理主義による進化論狩りが本格化し，現代日本の歴史教科書狩りのような様相を呈するのは，1920年代にはいってからである。運動の鼓吹者は，大統領戦にも打って出たことが三度もある，名うてのデマゴーグと噂された複雑な人物，ウィリアム・ジェニングス・ブライアン（1860-1925）であった。聖書の字義通りの解釈を信じるファンダメンタリストであった彼は，高等学校で進化論を教えたとして，テネシー州当局が教師ジョン・T・スコープズを州法違反で訴えたとき，告発側に立って，進化論を完全否定し，神による人間の創造説を唱え，耳目を震撼させた。訴訟は，公民権を守る団体，「アメリカ市民自由連合」および進歩派弁護士クラレンス・ダーロー（1857-1938）とブライアンらの宗教右翼との正面衝突の舞台となり，人類がアフリカ起源のサルという劣等動物から進化したという革命的学説（Ch.Darwin:*The Descent of Man*, 1871.）の真偽が裁判で問われたため，進歩派からは，「サル裁判」と揶揄されることになった。訴訟自体は，ブライアン側の勝利に終わり，スコープズは，罰金刑を受けた。これ以後，反進化論の波は，現在の宗教右翼の母胎と言われる「反進化論同盟」と「フライング・ファンダメンタリスト」の圧力のもとに，州当局に公教育から進化論を排除する運動となって，南部諸州に広がっていった。1920年代では，南部を中心として，20州の中高公教育で進化論を教えることが州条例によって，禁止された。しかし，マスコミは，進化論を敵視するファンダメンタリストの主張を無知蒙昧の象徴として扱ったために，1930年代以降，ファンダメンタリストたちは，南部のコロニーで，政治にはかかわらない形で，1970年代までは，ひっそりと信仰を守りつづけていた。とはいえ，一部の聖職者たちは，相変わらず政治の表舞台で活躍し，1930年代には，反カトリック，反ユダヤ主義，親ナチズムを標榜し，戦後は，反共マッカーシズムの一翼を担った。

思想面では，進化論は，スピノザの自然観――完璧な神は人類を完璧に作っている――と共通していて，人類性には，白人，黒人の区別はなく，人類の祖先は，結局は，ひとつで，アフリカ産のゴリラだった，と主張する。これは，人類性のなかに，白人性も黒人性も備わっている，と主張するに等しい。その意味では，南部の人種差別とは，真っ向から対立する思想であった。だから，黒人の公民権運動が盛り上がりを見せた60年代には，ファンダメンタリストたちは，再び逼塞状態に逆戻りしたのである。さらに，最高裁の二度にわたる判決によって，公教育から逆に，礼拝と聖書の読書が閉め出されるにおよんで，彼らの退潮は，歴然たるものになった。

彼らが息を吹き返し，政治の舞台に帰ってくるのは，70年代にはいってからである。進化論，共産主義の脅威につづいて論争の種になったのは，1973年の妊娠中絶裁判の最高裁判決であった。妊娠中絶を容認する最高裁判決に危機感を募らせたファンダメンタリストの聖職者たちは，人種差別を温存した教育体制をとる宗教系学校に課税する決定がなされたとき，反撃に立ち上がり，自分たちのアイデンティティーを守るために再び「十字軍」を結成した。

ここで歴史の奇妙な逆説が起こった。800万人とも言われた，福音主義者=ファンダメンタリストの有権者たちが1976年の大統領選で，その投票を集中させたのは，民主党のジミー・カーター（1924-）候補だった。彼がボーン・アゲインの信者だったからである。しかし，彼の寛容なリベラリズムの政策に失望したプロテスタント原理派は，共和党と政治的同盟関係を結ぶことになった。彼らは，共和党内の宗教右翼と結びつき，いくつかの宗教的圧力団体を結成し，自派の牧師たちを政治の表舞台に押し上げた。その圧力団体のひとつ，「モラル・マジョリティ」が資金援助を行ない，400万人と言われる自派の有権者たちを動員して当選させたのが共和党の大統領候補ロナルド・レーガン（1911-2004）であった。当選したレーガンと彼らとの関係は，一時冷めたが，84年の選挙の時には，またもやレーガンは，

父ブッシュ（1924-）を副大統領候補にして，「政治と宗教は切り離せない」と演説して，ファンダメンタリストたちとの関係を修復した。しかし，レーガン当選後，今度もまた彼らは，裏切られたので，1989年には，「モラル・マジョリティ」は，解散し，信者たちは，共和党の単なる投票機械と化してしまった。

しかし，2000年の息子ジョージ・W・ブッシュ（1946-）は，敬虔なボーン・アゲイン――彼自身は，この信仰のおかげでアルコール中毒から立ち直ったと称している――の信者として，ファンダメンタリストたちを当選後も裏切らなかった。当選直後にブッシュは，ホワイトハウス内に，関係５省（司法，教育，労働，保健厚生，住宅都市）を集めた宗教教育推進機関（Office of Faith-Based and Community Initiatives）を作り，そこに650億ドルもの巨費を投じている。この機関は，名目上は，慈善的な「なんらかの社会サービスを行なうすべての団体に資金援助を行なう」としているが，宗教右翼がこの資金を左右していると言われる。なにしろ信仰（Faith-Based）に基礎を置く団体のなかで，もっとも有力なものは，原理主義的キリスト教またはユダヤ教団体であり，しかも，9・11以降，この機関からイスラム教は，テロリスト「教」として，実質的に排除されているからである。いまや米国は，れっきとした「宗教国家」となっている。それもきわめて非科学的・狂信的宗教国家に。進化論も，妊娠中絶も，宗教右翼による教育のヘゲモニー奪取を通じて，再び窒息の時代を迎えている。これには，2004年の大統領選で見られたように，あらゆる種類の同性愛を禁じ，同性の結婚を非合法とする賭金が付け加わった。

統計によると，米国人の95%が神の存在を信じ，60%がなんらかの宗教施設に通い，80%が聖書を神から伝えられたメッセージと考えているという。この根強い宗教意識を背景にして，宗教右翼は，学校教育に礼拝を強制し，神による人間創造説を教えることを要求し，宗教学校へ通わせる父兄に対して公的給付を行なうようにと政府に迫っている。たとえば，その成果は，カンサス州に現われた。1999年8月，カンサス州教育委員会は，州教育カリキュラムのなかから，進化論を削除する決定を下した。カンサス州の今回の決定は，例外的なケースではない。13州において，進化論を教育カリキュラムからはずす申請が出され，進化論は，現在まさに教育の主要な掛け金となっている。進化論の否定が非科学的と見られることから，ファンダメンタリストたちは，新たな「創造科学」（Creation Science）を唱え，1970年に創造科学研究センターを立ち上げ，科学教育の修正に乗り出した。その精神は，科学はキング・ジェームズ欽定聖書の創世記の巻を証明するものでなければならない，というもので，この精神にもとづいて学校教育を行なう場合，これを進化論と同等に援助すべきである，と彼らは，主張している。なぜ，キング・ジェームズ欽定聖書（1701年版）かと言うと，この聖書の欄外注に初めて天地創造紀元前4004年説が書きこまれたからである[(3)]。また，アラバマ州では，生物学と地質学の教科書で，「進化論は事実ではない」と明記するように要求が出されているし，イリノイ州では，「進化論は係争中の理論である」として，この理論に関して，どのような立場で教育をするかは，教師の裁量であるとの決定が下された。

このように，米合州国においては，ダーウィンの『種の起原』発表後，100年は優に経つというのに，いまだに，進化論が政治性ばかりでなく哲学的・倫理的問題性を帯びていることは，『ダーウィン主義を擁護する』（*Dawinism Defended*）と題された，スティーヴン・ジェイ・グールドの書物の冒頭からもうかがえる。20世紀のダーウィンとまで，賞賛されるハーバード大学名誉教授のエルンスト・マイヤーは，ダーウィン擁護のこの書物に序文を寄せて，その冒頭で，次のように書いている。

「私のような，確信を持ったダーウィン主義者にとっては，いまのような時代にダーウィン主義を擁護する必要がいまだにあるということが不思議でならない。・・・・攻撃は，ファンダメンタリストたちから来ているだけではない。驚いたことに，ヒューマニストや哲学者からも来ているし，進化は認めるが，しかしダーウィン的な説明は拒むという，幾人かの生物学者からさえ来ている。・・・・しかしながら，ダーウィン主義の本当の核心は，自然淘汰の理論である。この理論は，ダーウィン主義者にとって，大変重要である。というのも，この理論のおかげで，適応の説明や自然神学者の『はかりごと』が神の介入によってではなく，自然な方法によってできるようになるからである[(4)]。」

なぜ生物進化論がこのように，学問領域ばかりでなく日常生活の広い範囲にわたって，いまだに攻撃にさらされているのだろうか。もちろん，その謎は，進化論学説そのもののなかに含まれている。そこから発せられるメッセージがわれわれの琴線のどこかに触れ，賛成・反対の戦いを巻き起こすということである。その際，争点になる問題は二つある。ひとつは，宗教的

教義の基本にかかわり，もうひとつは，近代的な進歩観にかかわっている。そのことは，上記の引用文からもわかることである。

宗教と進化論

天地創造を神の業（わざ）とするあらゆる宗教教義は，自然界における神の目的論的意図を前提としている。完全で，絶対善なる神は，人間などの諸生物を創造するに当たって，人間には考えられないほどの完全性でもって，世界を創造し，それぞれの生物をミミズや蛇に至るまで，目的を持って世界に配置した，というのである。だから，キリスト教では，のちに聖トマスが作りあげるように，生命には壮大な上下関係を持つ階梯すなわちヒエラルヒー（位階秩序）が存在するのである。生命存在には，優劣があり，多様性が価値を持つとは，まったく考えられていない。

たとえば，キリスト教の聖書，創世記には，蛇がなぜ大地をはいずり回るように，運命づけられたか，その理由が書いてある。エバをそそのかして，知恵の実を食べさせた懲罰として，蛇は，みなから嫌われる姿になって，大地をはいずり回らざるを得ないように，神による判決が下ったわけである。同じ箇所には，出産がなぜ苦痛を伴うのか，人間がなぜ，労働をしなければならなくなったか，そのわけも書いてある。引用しておくと，その間の事情は，次のようである。

天地と万物を創造した主は，実は，蛇を「野の生き物のうちで，もっとも賢い」動物として造った，というのである。しかし，蛇は，神の命令に背くように，エバをそそのかしたので，神から懲罰を受ける。

「このようなことをしたお前はあらゆる家畜，あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は，生涯這いまわり，塵を食らう。」

つまり，蛇のみじめな姿――とはいえ，西欧的ホモ・ヒストリクス（歴史人）から見て，みじめにすぎない。世界には，蛇神を崇拝する民族も存在する――は，神による懲罰なのである。一七－一八世紀のキリスト教批判者には，いったいなぜ，神は，このようにまわりくどい「はかりごと」を行なったのか，その理由がわからなかった。神がなぜ，わざわざ地上でもっとも賢い存在として，蛇を創造したのか。そして，のちに「はかりごと」を修正して，蛇を罪に落としたのか。最初から，蛇が誘惑すると，神にはわかっていたはずなのに・・・・。言い換えると，自然界とくに生命界に目的を考えたとたんに，われわれは，一切を合理的に理解し，説明する手段を失う，ということである。それとともに，神が被造物に「裏切られる」という，本末転倒の，神の完全性の瀆神的な否定を前提としなければならなくなる。

したがって，出産時の苦痛も，男女差別も，神による懲罰である。

「お前は，苦しんで子を産む。お前は男を求め，彼はお前を支配する。」

さらに，狩猟・採取のエデンの園からの追放は，農業・牧畜労働への人間の屈従を意味した。

「お前は女の声に従い，取って食べるなと命じた木から食べた。お前のゆえに，土は呪われるものとなった。お前は，生涯食べ物を得ようと苦しむ。・・・・お前は顔に汗を流してパンを得る。」

これもまた，神による懲罰である。農業・牧畜労働は，社会進歩を意味するのではなく[5]，楽園追放の必然的帰結で，これもまた劫罰なのである。

とくに，懲罰としての農業労働に対する嫌悪は，創世記においては，最初の殺人と言われる，兄カインによる羊飼いの弟アベル殺し[6]に，典型的に現われる。

「アベルは羊を飼う者となり，カインは土を耕す者となった。」

もちろん，懲罰ということは，存在物が欠陥を持っており，不完全であるから，その代償として，下されるもので，もしも存在物がこの懲罰に耐えることができなければ，それだけ不完全さは増すことになる。しかし，生命存在の秩序にかかわる，神による懲罰は，悔い改めを拒否するものである。この優劣を定める秩序にかかわって，神により下される懲罰は，劫罰すなわち，永遠につづくとされる罰であるがゆえに，恐ろしいのである。ということは，劫罰の場合は，改悛による更生の余地がないということである。

この思想が神の完全性の原理といかに背反するかは，火を見るより明らかであろう。言い換えると，神による世界創造の際に，神の「はかりごと」に狂いが生じ，誤謬があった，ということである。創造時における世界の不完全性が前提とされているがゆえに，神自身の

不完全性が暗に想起されるのである。この不完全性を作り出しているのが悪魔であり，反キリストだというのである。そこからきわめて単純な善悪二元論が導き出され，こうして，スピノザがすでに何世紀も前に徹底的に論破した迷信が息を吹き返してくる。政治，そしてその延長線上にある戦争の大義のなかに，この強烈な終末論的善悪二元論がすりこまれる。そこからは，原則的に間違った行動しか出てこない。

実体は変化するのか

進化論の成立にも歴史がある。神が作った地上の秩序の精華たる生物種=ヒエラルヒーは，中世においては，アリストテレス的神学者，聖トマスの存在物の階梯とともに，啓蒙の時代においては，ウプサラの偉大な植物学者リンネの分類学とともに，固定されているはずであり，種のあいだで創造後の移動があったり，種の消滅・生成があったりすることは，キリスト教が根をおろした西欧文化圏では，最初から認められるはずもなかった。種は，唯一不変であり，永久に同一のもので，その意味では，種には，動かざる実体が宿っていた。ダーウィンもまた，現存生物および化石に見られる生物すべてを，科学的に説明する進化論を書斎で暖めたまま。「20年間，秘密を守りつづけていた[(7)]」のである。

キリスト教教義のなかに二つの大きな謎（秘儀）があった。三位一体教義と聖餐の秘儀である。そのどちらも本質を異にするものが同一物である，と主張することから成り立っている。神に関する場合，言い換えると，絶対的観念を問題にする場合には，本質とは実体であり，普遍的真理でなければならない。

三位一体とは，言うまでもなく，神（唯一神）においては，父と子と聖霊がいずれも神として唯一のものである，というのである。ここですぐ提出される疑問は，常識的なもので，父は，子よりも時間的に先だっているはずで，時間的に前にあり，時間的にあとにある子が誕生する原因であるはずなのに，その父がなぜ子と本質を一にし，実体を一にしているのか，疑問だ，というのである。聖霊の場合は，父は，言葉と精神を持つ完全な（言い換えると絶対的本質）神であるはずなのに，その本質の一部がなぜ聖霊に委託されなければならないのか，疑問だ，というのである。

聖餐の秘儀の場合は，事態はもっと単純で，イエス・キリストの血と身体とされるワインとパンは，それぞれ実体を異にしているのに，なぜブドウを原料とするワインと血が同一物で，小麦粉を原料とするパンがイエスの身体と同一なのか，説明がつかない，というのである。

なぜ，このような疑問が生まれてくるのかというと，人間の表象的思考においては，本質または実体を一にするものは，分割不能で，因果関係を持たない唯一にして，自己同一のものでなければならない，と考えるからであり，ましてや唯一神というような絶対概念は，「絶対に」分割不能で，変化しないものでなければならない，と考えるからである。

キリスト教では，これらの疑問に答えるために，前者の教義については，三つの位を設定し，それらを位格と呼び，人間の目に映る役割は，それぞれ異なるが，本質的には，同一のものとした。後者の教義については，神の摩訶不思議な能力を設定して，聖なる実体変化からその一時的な同一性を説明した。しかし，実体という変わらざるものが，変化するということの背理性と説明の呪術性を意識したプロテスタントの場合には，実体の異なる物質によるイエス受難の「想起」説が唱えられるようになった。

人間の本質を考える場合も，生命進化論を考える場合にも，キリスト教における上記の難問に類似した難問は，必ず生じてくる。本質とか，実体とかという普遍=不変=同一=絶対の概念を人間が思考しているからである。

たとえば，ダーウィンの天才が出現するまでは，動植物の化石は，実体変化を意味するがゆえに，深い謎の闇に包まれた物質であった。なぜ，動物や植物という，神によって定められた本質を持ち，実体を有する個物が単なる石に変化するのか。動植物は，元来は，石ではなく（したがって石と実体を異にする），呼吸をし，生命活動を展開し，子孫を持つことによって，神から授かった同一の形姿を連綿と維持していく生物であるのに対して，石は，一切の活動をやめた無生物ではないか。

この疑問に対して，まさに革命的な答えを出したのがダーウィンであった。化石と動植物は，同一実体である，というのである。つまり，石と三葉虫とは，同じ実体から成立するゆえに，三葉虫の化石が存在してもなんの不思議もないことになる。現代分子生物学では，人間の身体も植物の身体もみな同一の炭素分子化合物と見なしている。だからこそ，古代に朽ち果てた動植物が鍾乳石になったり，石炭・石油になったりするわけである。この化石問題が解決されたことによって，生物進化の，繁茂する多様性の生命樹が誕生した。

ダーウィンは，種という，特殊な生物個体の原型的本質を充満させている物質が永久不変の存在物ではなく，時間とともに変化するということを，ラマルク，ついでジョフロワ・サン=ティレールの着想に触れながら，次のように解説している。

「ラマルクは，ヒトを含めすべての種は他の種に由来するという説を主張している。かれははじめて，生物界においても無生物界においてもあらゆる変化が法則の結果であり，奇蹟の関与があるのではないということの確実さに，注意を喚起するという点で，重要な貢献をした。・・・・ジョフロワ・サンチレールは，・・・・すでに一七九五年に，われわれが種とよんでいるものはおなじ型のさまざまな変形なのではないかと，考えていた。あらゆる事物の起原以来，おなじ種類がつづいてきたのではないというかれの確信は，一八二八年まで公表されなかった。ジョフロワは変化の原因として，おもに，生活条件すなわち<環境>を考えていたようである[8]。」

もちろん，ダーウィンは，ラマルクの目的論的進化論について，批判を加えることを省いていない。キリンの首の長さをめぐる議論は，『種の起原』のなかで，長々と議論されている。しかし，ラマルクの進化論の要点は，もちろん，自然界のある生物種が他の生物種から発生したものである，という見解にある。

ダーウィン学説の直接の系譜に属するウェルズの進化論は，もっとさらに革命的なもので，後年，ゴビノーによって代表される人種主義のイデオロギー的誤謬に，あらかじめとどめを刺すような議論を展開していた。同じダーウィンは，紹介して言う。

「一八一三年にウェルズ博士は，『皮膚の一部がニグロに似ている白人女性についての報告』を王立学会でよんだ・・・・。<人為的に>なされているものは，『自然によって，もっとゆっくりではあるが，同等の効果をもって，それぞれ居住する国に適したヒトの諸変種の形成のさいにもなされたと思われる。アフリカの中部地方に最初に住んだ少数で散在的な住民のうちにあったヒトの諸変種において，あるものは他のものよりも，その国でおこる病気をまぬがれるのに，より適していたであろう。この人種はそのうち数がふえ，他のものはへったであろう。それは，病気の攻撃にたえられなかったためだけでなく，より強壮な隣人と競争することができなかったためでもある。私はこの強壮な人種の体色は，・・・・当然，暗色であったと考える。ところで同様な変種形成の傾向はなお存在しており，時がたつにつれますます暗色の人種が生じたであろう。そして，もっとも暗色のものがその気候にもっとも適していたであろうから，ついにはこのものが，それが生じたその国において，唯一の人種ではないかもしれないがとにかくもっとも分布のひろい人種になったであろう。』かれはこれらと同様の見解を，寒冷な土地の白色住民にも拡張している[9]。」

ダーウィンが後年言うには，このニグロも，もとをただせば，ゴリラを祖先としているのだ。あまりにも顰蹙を買った書物のなかで，ダーウィンは，人類の祖先として，精神と肉体という実体を備えた存在とはあまりにも異なるアフリカ大陸の類人猿を指名している。人類の祖先が猿だというのは，人類が精神活動を展開するからといって，一般の生物とは異なる，神の神聖な法則によって，特別な支配を受けていることを意味しない。所詮，人類も生物にすぎないのである。

「これまでの章にあげた事実は，その間をつなぐ鎖の環こそまだ発見されていないとはいうものの，人間がある下等な生物の子孫であることを最も明白に物語っているであろう。人間は数多くの，軽度でしかも多様な変異をおこしやすくはあるが，これらはもっと下等な動物に見られるのと同じ一般的な原因で起こり，同じ一般法則に支配され，それによって伝えられるものである[10]。」

つまり，人類の肉体は「他の哺乳動物と同一の相同的配置にもとづいて構成されており，同じ発生学的成長の諸段階を経過する[11]」から,「人類の起原」は「ほかのあらゆる動物のそれと[12]」同じであり，それだからこそ，同じ一般法則に支配されているのである。

とすると,「人間の先祖が，狭鼻猿類の幹から分かれたときの進化段階における人間の誕生の地はどこだったのだろうかというのは，当然でてくる疑問である。その先祖が狭鼻猿類に属していた事実から，旧世界にすんでいたことは明らか[13]」である。したがって，その生息場所はアフリカ大陸以外にはない。

「アフリカにはゴリラやチンパンジーときわめて近縁の絶滅種が，かつてすんでいたと考えられる。またこの両種は，現生のものとしては人間に最も近縁であるから，人間の初期の先祖が，地球上の他のどの地域

よりも，アフリカ大陸にすんでいた可能性がいくぶんかは高いのである[14]。」

しかし，進化論の反対者は，実際にサルとヒトとをつなぐ切れ目のない環が見つかっていないこと――「ミッシング・リンク」を，有力な根拠とするが，ダーウィンによれば，「この切れ目は，系統上のあらゆる部分に，しばしば現われる[15]」もので，猿類のあいだにも見られるから，反対論を支える理由とはならない。そもそも進化論に切れ目のない環を見つけること自体が無理な話であって，それは，「進化」が「進歩」であり，「完成」であるという論理学上の罠にはまってしまうことである。生物はそれぞれ完成形態である，というスピノザ的無目的論に立てば，現在，目にする多様な生物がみな，その類において完成していると考えなければならない。猿は人間になるために存在しているのではないのである。形としてしか，物は存在しえない以上，環はつねに切れているのである。結局，「人類は，サル亜目のなかの狭鼻猿類すなわち旧世界ザル類から，新世界ザル類が分かれた後に，旧世界ザル類から分かれた[16]」ということになる。

簡単に言えば，人類の先祖は，サルだということになったのである。しかし，人類とサルは，形姿，すなわち，スコラ用語では，形相（forma），アリストテレスでは，エイドスが異なる。両者は同じ形姿を持たないがゆえに，同一の本質を持たないかに見える。しかし，この形姿の相違は，あくまで表面的なもので，相違が生じる根本原因は，与えられた環境のなかで発揮される生物種の生存努力と適応度にある，というのである。こうして，進化論によって，本質=実体の同一・不変性と形姿=形相の異なる生物多様性の必然性とが説明されたのである。

白人になるか，黒人になるかも，ダーウィンによると，大した問題ではない。なぜなら，「最もかけ離れた人種でさえも，最初に考えるよりもははるかに外見がよく似通っているもので」あり，「いくつかの例外はあるとしても，ニグロの種族は，コーカサス人種の顔だちをしている[17]」からである。それゆえ，白人優位を唱える，白人にも，黒人の要素が存在することになる。それ以上に，ダーウィンがいくつかの観察結果を参照したとき，「アフリカでは他の人種と結婚したニグロの子供は，まっ黒か，あるいは完全に白いかどちらかで，白と黒の混じったものはまれである[18]」ということになると，黒人差別などということにも，さらにこれはヨーロッパ人にも妥当することであるというから，ゴビノー流のコーカサス人種優位論にも，痛撃を与える主張である。

現代では，進化論は，さらに「進化」を示し，ついには，クリスチャン・ド・デューブの言を借りれば，「生命はひとつである」という結論にまで至っている。つまり，われわれ人類は，もとをただせば，恐竜時代をも生き抜いた，海水魚か，あるいはもっと低級なバクテリアだったのかもしれない，というのである。

進化か，変化か

種の進化（evolution）を問題にする場合，この訳語から必然的に誤解が生まれる。それは，ダーウィンの時代も含めて，はるか昔から生じていた誤解である。

ダーウィン自身は，進化（evolution）という語をほとんど用いなかったことは，よく知られている。彼自身は，みずからの学説を「変化を伴う出自（または由来）」と呼んでいた。evolutionという用語は，スペンサーが定着させるまでは，ダーウィンの学説には適用されていなかったということである。なぜだろうか。それは，この用語がダーウィンの時代には，生物学においては，種の未発達な原型が時間の経過とともに「展開」する，という意味を帯びていたからである。原型種の展開ということになれば，それは，同じ形をした小さなロシアの入れ子人形が同じかたちで，次々と大きな形になっていくこと，小さな原型が単に物理的に拡張していくことしか意味しない。では，この原型種は，誰が作ったのか。もちろん，究極的には，神である。つまり，神は，完璧なかたちで，生物種を，はじめから目に見えないほど小さなかたちで作ったということである。したがって，その後の過程は，環境への適応ではなく，原型の物理的展開ということになるのである。種そのものが「変化」するというダーウィンの革命的学説と種の不変を前提とする，この旧来の学説とがいかに矛盾・対立するかは，明らかであろう。

ダーウィン的に解釈された進化とは，自然から一切の目的論を排除しているために，たんに種が環境に適応していることのみを意味し，そこに適応種の価値についての，比較は一切排除されている。すなわち，現在，目の前に生きて繁栄している種がすべて，環境に適した，「最善」種だということである。というよりもむしろ，種そのものに，価値の軽重が存在しないことから，善悪の区別は，まったく無意味なのである。

この点は，人間界の倫理とまったく同じことである。世界に多様な民族が多様な生活を，同じ時代を共有す

るかたちで，営んでいる以上，地球上の全民族に適用される唯一の共通倫理は，「いま，生きて，存在している」ということが，最善であり，完全な「徳」だということである。これをおいて，共通の普遍的価値はない。生物界と人間界とは，生への努力（スピノザ的コナツス）を共有しているために，生きていることに価値を置かざるを得ない点でも，一致してしまうのである。このような意味で，種に優劣の差異を考えることはできないのである。

「進化論」と訳されている英語のevolution にあてられた訳語「進化」の「進」とは，もちろん「進歩」という価値観念を想起させる。ところが，元来，evolutionという英語には，このような価値観念は含まれていない。むしろこの語は，「変化」と訳すべきなのだろう。つまり，「変化」は，環境の変化に合わせて，最適種が生き残るように種が変化し，適合していくということなのである。もしも，適合的変化が種の永続に――個々の個体の永続ではない――つながるようであれば，そのときはじめて，進化という，価値観念を伴う用語を当該種に対して，用いることができるだろう。

だが，それは，あくまで，人間の価値観念から見ての話である。人間は，個々人の生命の恒久的持続を善と考えるからである。人間のなかで，永遠の生を望まない者はいないほど，延命ということは，人間の価値観念のなかで，最上位に位置づけられている観念である。ときにこれは，独善的なエゴ的個人の延命を種=社会の延命よりも優先させる，という超利己主義にさえ，行き着く。それほど，人間には，生への執着がある。しかし，これはあくまで，精神を備えたホッブズ的人間にのみ特有の価値観である。言い換えると，長寿を望んでやまないのは，人間（しかも，実は，一部の「文明人」）のみであって，他の生命存在にとっては，むしろ短命の方が種の永続にとってプラスに働く場合が多いのである。地上でもっとも繁栄している動物は，たいてい人間より短命である。しかし，種は，永続している。

また未開部族の場合には，世代交代の重要性が認識されているので，彼らにとって，長命は必ずしも善とは考えられていない。世代交代がスムーズにいかなければ，共同体は，年老いて狩猟採取または農業労働に適しない人間を多数抱えこむことになり，それだけ，食料調達の必要性と人口の増大に起因する諸困難をみずからに招き寄せることになるからである。未開部族の老人たちは，迫りくる死を第二の生への旅立ちと考えて，甘受し，むしろ生前からそのときに備えて，諸事万端整えて，死を迎えるのである。そして，生きているあいだは，幼児の世話をしたり，かつて狩猟採取で活躍した時代のノウハウと食物のありかを若い世代に伝えたりすることによって，細々とではあるが，共同体の片隅で，慎ましく生きていくのである。ここでは，何度も引用することになる，クリスティアン・ド・デューヴの次の文章を味わうことにしよう。

「遠い昔の私たちの祖先はみな，狩猟と採集の生活を営んでおり，その経験から得た季節ごとの知識――いつどこでどんな果物が豊富なのか，いつどこに獲物の弱々しい子供がいるか――を頼りに，一つの場所から他の場所へと移動していった。その一部は洞窟に格好の隠れ家を見つけ，一時的にそこに定住したが，やがては食物が尽きて移動を強いられた。・・・・衝突が起こるのはもっぱら両方がたまたま同じなわばりに目をつけたり，雌の数が少なくなったときであった。子供の養育，保護，世話は共同で行った。彼らが発するさまざまなうなり声にはそれぞれに特別な意味があり，それによって遠く離れた所でも暗闇の中でも連絡を取ることができた。十分な数の子孫を産んでしまった後は，不必要に長生きすることは珍しかった。中には子供を産んだ後も長生きする個体もあったが，そのような長老は群れに役立つことで群れに面倒を見てもらった。自然淘汰はこのような生殖的には役に立たない長老を見捨てたり殺してしまったりした群れよりも，長老の面倒を見た群れに有利に働いた。利他的なグループのほうが繁殖の成功率が総合的に高くなったからである。たとえば，働き盛りの大人がその体力と技能を何か有用なことに利用している間，長老は代わりに子どもたちの世話をした。危険な状況に出くわしたときにも，長老の経験がやはりグループの生存に役立ったのである[19]。」

本質的に人類が多数の労働力を必要とする農業と牧畜（家畜化）の時代にはいってはじめて，人力と経験が労働力の重要部分と見なされて，健康で長命であることが美徳とされるようになった。とはいえ，姥捨て山伝説でも知られるように，共同体の長老は，飢饉のときには，女児と並んで，まっさきに，強制的な「処分」の対象とならざるを得なかった。この点での農業時代の残酷さは，狩猟採取時代の比ではない。

ところで，今日のような資本主義的工業化時代には，ふたたび労働力の新陳代謝が尊ばれ，老人は，無駄に

禄をはむ社会のお荷物となっている。それでもなお，長寿が美徳とされるのは，かつての前工業化時代の名残か，または，人命をなによりも尊ぶ近代的ヒューマニズム思想の影響かのどちらかである。しかし，今日の「無縁社会」に見られるように，社会に老人を養うだけの余裕がない時代に長寿を美徳とするのは，或る意味では，残酷なことであり，統治者側からのデマゴギーでもある。

ともあれ，生命界においては，長寿が美徳ではなく，むしろ早死にこそ，価値があるとされる点を哲学的に把握しようと思えば，スピノザの『エチカ』，第４部の序言を参照しなければならない。そこでスピノザは，あらゆる存在物にとって，持続の長短は，その本質から発しない以上，生物は生まれる必然性を本質としない（『エチカ』，第2部，公理1）から，当の事物にとって，持続の長短は，その完全性・不完全性とは，まったく関係がない，と主張している。ある意味では，これは，反ヒューマニズムの思想でもある。

「一般的に，完全性を私は，実在性のことと解するであろう。言い換えれば，おのおのの物がある仕方で存在し作用するかぎりにおいて，その物の本質のことと解するであろう。そしてこの際，その物の持続ということは考慮に入れない。なぜなら，いかなる個物も，それがより長い時間のあいだ存在に固執したゆえをもってより完全だとは言われないからである。事物の本質には，なんら一定の存在時間が含まれていない以上，事物の持続は，その本質からは決定されえないのであるから。むしろおのおのの事物は，より多く完全であっても，より少なく完全であっても，それが存在し始めたのと同一の力をもって，つねに存在に固執することができるであろう。したがってこの点においては，すべての物が同等なのである。」

生命存在の本質に，長命ましてや永遠の生などが書きこまれていない以上，スピノザの言うように，個々の生命存在は，他の生命存在（あるいは環境）の大海において，おのれの運命すなわち必然性に従う期間だけしか持続できないのである。そしてすべてが必然のしからしめるところであり，自然界が完全にできているのであれば，その期間の長短自体には価値はないということになる。すなわち，ダーウィンの進化論的世界では，個々の生命存在の持続の長短は，もっぱら種の永続という観点からのみ評価されなければならない，ということである[20]。進化の「進」とは，そのような意味でとらえなければならない。

自然界の完全性と目的論の排除

自然観の重要な落とし穴は，人間のように精神や意志をまったく持たないとされている――その片鱗さえ持たない――無生物の場合にでも，自然界に目的を想定する誤謬に陥ってしまうことである。それは，人間の力ではとうてい支配することができない全自然の光景を目の当たりにするとき，表象=人間が陥りやすい罠である。全自然の一部にしかすぎない（スピノザ）人間に，もとより全自然の秩序の「作り手」を想定することの不合理さがそこでは考えられてすらいないのである。

たとえば，鉄腕アトムのことを考えてみよう。この人造少年には，小惑星を軽々と持ち上げる馬力さえ備わっている。しかし，だれひとりとして，この超能力を持つ少年を自然界の「作り手」だとは，考えない。なぜなら，所詮鉄腕アトムは，人間の手で発明されたとされているので，人間的形姿をしており，目も左右についているだけで，手は二本しかなく，足も二本しかないからである。つまり，彼は，「限定」されている，ということである。もう一度スピノザの着想を借りれば，「限定は否定である」から，自然界には，必ず鉄腕アトムを越えるパワーを持った存在があるということである。結局，彼は神でもなく，おそらくは，神の子ですらない。

この事態を人間の認識の側から考えてみよう。そうすると，人間の想像力（あるいは夢）には，限界がある，ということがわかる。人間は，すべて現実に存在するものを材料にしてしか，想像力を展開することはできない。相変わらず，無から有は，どうしても生じないのである。したがって，人間には，この材料（マテリアル）からなる自然世界を越えた存在（神）のことを，想像することすらできないということである。

ただし，これには，条件が付いている。人間精神には，「神は存在する」というような命題を想像することができない，ということではない。精神の世界（言語界）だけであれば，つまり，現実の世界にまったく介入しない，という条件を付けることができれば，人間精神には，一切証明不要=不可能の――したがって，真でも偽でもない――事柄を「想像する」ことは，できる。これこそ，中世スコラ哲学でさんざ議論され，かの唯名論者オッカムが単刀直入に「神の存在については証明不能である」と切って捨てた論理展開である。

なぜなら，「リンゴは赤い」という命題は，「赤いリンゴが現実に存在する」という命題の真偽について，口を差しはさめるような権利をなにひとつ持たないからだ。後者の命題のように，事物の存在にかかわる命題を証明しようと思えば，実際に，赤いリンゴを木からもぎ取ってこなければならない。したがって，人間が想定するような命題「神は存在する」は，存在するものを実際に眼前に置かないかぎりは，真偽の判断はつかないのである。しかし，そのような「頭で考えられただけの存在」（スピノザによれば「想像の有」）には，先ほどの前提条件により，物質的な世界を創造などできない。

したがって，ここでは，人間精神は，まったく世界観を転倒しなければならないのである。神が世界を造ったのではなく，世界そのものが神なのだ。そして，人間は神の存在することについて想像を巡らすことができるが，それが真なる命題であるかどうかは，判断基準を持たない，ということである。こうした見地から無生物よりなる世界に，なんらかの目的があると想定することは，できないという命題が出てくる。

しかし，生命存在を取り巻く環境については，一般に，ひとはそれを無機質で，没価値的なものと考えて，環境の進化とは言わない。たとえば，恐竜たちが活躍した高温多湿の時代に比べて，氷河時代を決して人間は，進化した環境だとは，言わないだろうし，そのように評価しないだろう。また，亜熱帯の台湾と温帯の日本とを比べてみて，日本の環境の方が優れている，と考えるのは，よほどの国粋主義者か，科学に無知な人間のいずれかであろう。ビッグ・バンの世界創造零年と今日の地球環境とを比べて，価値判断を下せる科学者はいない。台風や地震というような天変地異に至っては，人間は，悪感情しか抱かず，価値すら認めようとはしない。

また，環境とは，個々の生命存在にとっては，本質的に「他者」にほかならないから，そのなかには，もちろん，異種間の生存競争の競争相手が含まれる。この場合は，ある種の異常なほどの増殖は，他の種にとっての害悪である。しかし，異常増殖する種にとって，それが幸福かと言えば，それは必ずしもそうではない。なぜなら，簡単な話で，生命存在は，すべて従属栄養であるから，異常増殖をした種は，必ず食糧不足に陥り，やがては，絶滅してしまうのである。すなわち，増殖が短命を招き寄せるのである。その後に残るのは，種の上位概念（類）全体の死滅である。たとえば，それは，日本のような島国の場合である。繁殖力の強い外来種は，異常増殖し，他の変種を絶滅させた荒廃地に一時の繁栄を誇ったあと，食糧不足に陥り，絶滅する。そして類全体が消滅するのである。自然界においては，種・類の多様性の自然な保存こそ，生命の繁栄にとっては不可欠なのである。

こうしたことからも，自然界の環境変化は，いずれの点においても，無価値的なものと見なさざるをえないし，そこに自然界の「完全性」に向かう，神より与えられた使命を読み取ることなどはじめからできないのである。

それでは，このような無機質かつ没価値的環境の変化に，ただ適応しているだけの生命存在を，善悪観念で判断できるだろうか。それは，たとえてみれば，台湾の四重渓のオナシアゲハの美しさと日本のギフチョウとにおいて，どちらが美しく完全か，と問うようなものである。この問いかけは，まったく無意味である。蝶が美しいのは，種の永続と環境への適応のためにほかならず，そのこと自体にどのような価値もありはしないからである。したがって，自然淘汰にもとづく適者生存も，一切の価値観念から自由にならなければならない。そのときはじめてわれわれは，科学的生命進化論を形成することができるだろう。

例を出せば，いまの問題をもう少しわかりやすく，理解することができるだろう。たとえば，ライオンと虎である。ライオンと虎とを比べてみて，ライオンは，たてがみを持っているので，進化した種だと言えるだろうか。ライオンのたてがみは，オスの権威を示す一種の記号のようなものだと言われている。もしも虎にもたてがみを持つ種が生まれたらどうなるだろうか。おそらくそれは，虎の生活環境と適合しないがゆえに，そのような変種虎は，早々にも死に絶えてしまうだろう。というのも，ライオンは，低い草木しか生えていないステップに住む動物であるのに対して，虎は，密林での，しなやかな動きが要求される動物だからである。密林でスピーディに運動するためには，あの風にそよぐ威風堂々たるライオンのたてがみなど無用の長物である。一方の無価値が他方の価値なのである。両者を越える絶対的な基準などありえない。

自然は決して無駄なものを作りはしない。すべては，必然性を持って生まれてくる。この事物の必然性を把握し，理解することが大事であって，事物に即して理解するのではなく，むしろ人間の価値観念に即して，外部の事物を裁断することは，愚かな間違いなのである。そうすると，進歩という観念自体がいかに現実に適合しないかがわかってくる。ジャングルに住む人間

に，自動車は，無用の長物である。ジャングルに住む人間にとっては，車好きの日本人ほど，「劣等人」はいないことになる。ジャングルでは，進歩の成果たる自動車は，いくら走ろうとしても，すぐ木々に衝突し，前進も後退もできないのである。そうすると，ジャングルの未開部族の生活とわれわれの文明生活とを比べること自体が空しい，ということにならざるを得ない。

事物を事物の必然的論理にのみ即して判断することを徹底すると，世界観の転倒が生じる。これまで，進歩と考えられてきたものがただ単なる外界への適応にすぎない，ということになれば，すべての物差しをもう一度リセットする必要が出てくる。たとえば，人類は，乱獲と気候変化による動物の減少および人口増大によって，食糧難に陥ったことから，やむなく農業と牧畜（家畜の登場）を始めざるを得なかったのである。考えても見よ。一年の収穫期に強力な台風や大洪水が起こって，人類は，何度収穫をフイにしてきたことだろう。そのために，幾度，飢饉に苦しんできたことだろう。狩猟採取の時代には，ありあまるほどの動物や木々の実がそちこちにあったのである。彼らの労働時間と農業・牧畜の労働時間とを比べてみよう。明らかに後者の方が長時間で，しかも重労働なのである。したがって，事物の必然性にしたがって判断するかぎり，人類は，進歩してきたのではなく，相変わらず，外界つまり環境に適応してきただけなのだ。工業も農業と同じか，あるいは，ことによれば，その何倍も問題を引き起こす解決法である。

高等動物ではなく，複雑な動物

人類を称して高等動物などと表現される。この日本語もまた，非科学的な価値観念を伴っているので，誤解を招きやすい。進化が進歩を意味しがちであることから，進化という言葉の使用を避けたように，高等動物という表現も，ダーウィン自身これを用いることを避けている。

神によるものか，人間の価値観によるものかは，別にして，生物に価値観念がいささかも考えられない以上，高等・下等の区別もあり得ないし，それを考えることすら，非科学的なのである。

では，単細胞生物と猿の違いはなにかといえば，それは，生体の複雑性の違いである。複雑性は，それが増大すれば，必ずしも，価値論的に高い，というわけではない。単純な作りをしている単細胞生物と，複雑きわまりない，微妙なバランスに支えられている人体とを比べてみたとき，「故障」しやすいのは，明らかに人体の方である。たとえば，排尿作用ひとつとっても，膀胱の筋肉と尿道の筋肉とは，接しているにもかかわらず，働きは正反対で，膀胱が収縮するとき，尿道は弛緩しなければならないのである。これを「複雑」な作用と呼ばないわけにはいかない。これが「高等」作用でないことだけは，たしかである。なぜなら，真に高級なものは，たいてい単純な作りをしていて，ほとんど故障しないからである。

同じ例は，コンピュータ管理の機械についても言えることである。機械に複雑なプログラムを実行させればさせるほど，物理的な機械を取り巻く四囲の条件を敏感に反映して，センサーが働き，機械は，しばしばストップする。しかし，故障が多いからといって，機械が低級であったり，高級であったりするわけではない。ただそれは，複雑なだけなのである。真に「高級」な機械は故障しないだろう。そうなれば，はじめて，われわれは，価値と事物の存在が一致するが，そのようなことは――スピノザの実体の定義によると――現世の事物について，考えることができないし，そのような意味で，高級な機械を人類が手に入れることも，その限定された持続からして，おそらくはないであろう。

また，生物界で，単純性で手に入れられるものは，増殖作用の旺盛さであり，複雑性で手に入れられるものは，少数生産である。バクテリアは，地上でもっとも繁栄していて，もっとも多数を占める生物である。バクテリアは，あっという間に幾何級数的に再生産されるので，その増殖力によって，環境に適した変種を多数生みだし，地上で繁栄を誇っているのである。下手をすると，地上は，バクテリアだらけになっていたかもしれないとは，クリスティアン・ド・デューヴの言である。

それに反して，人間は，何年もかけて，数人の子供を持つだけである。では，どちらに価値があるだろうか。比較することは不可能だし，また，無意味でもある。高等動物という用語がいかに人類中心の偏った，非科学的用語であるかがこれでわかるであろう。

進化の途上

生物の或る器官は，ひとつの目的を果たすように，うまい具合にできている。しかし，進化論的見地からは，当該器官は，永久不変のものではなく，環境変化とともに，すでに繰り返し述べたように，変化してい

くのである。万物は変化のるつぼに入っている。

一方で，自然は飛躍しないから，進化には，必ず途中の変化過程があることになる。だとすれば，ひとつの目的を果たしている器官が別の方向へ進化する過程では，どのようなことが起こるだろうか。目的論的自然観を排しながら，進化過程を見るとき，進化途上にある器官は，どのような目的にかなっているのだろうか。どのようにして，まったく別の目的に或る器官が奉仕するように変化するのだろうか。この過程になんらかの意図や目的がまぎれこむと，またもやわれわれは宗教的（目的論的）自然観に舞い戻ることになる。実際に自然には，目的がなく，だれかによって作られたものでもないから，或る器官の存在とその機能とは一対一にしか対応しないのである。

自然界の目的論的解釈にとって，都合のよい例を挙げてみよう。それは，有名な二枚貝のランプシリス・ウェントリコーサの擬似魚の例である[21]。このランプリシスの現在の姿は，まるで魚をおびきよせるために魚の姿をした皮膜の延長物を持っている。

しかし，この擬似魚は，元来は育児嚢が進化したものである。なぜ，擬似魚になったのかの秘密を解くカギは，ランプシリスの繁殖様式にある。ランプシリスが属するイシガイ科の貝の幼生は，成長の初期には，魚に乗っかることによってしか成長できない時期がある。そのためにイシガイ科の貝の幼生には，二つの小さな鉤状の突起があり，それを通りすがりの魚にひっかけて，上手に幼生は魚に乗っかるのである。ところが，ランプシリスには，この鉤状の突起がない。そこで，ランプシリスは，魚の口の中に入りこんで成長するという戦略を採用する羽目に陥ったのだが，そのためには，魚が近づいてきてくれる必要がある。魚を近づけさせることに役立ったのが，別の目的に使用されていた育児嚢であった。これが徐々に発達し，肥大し，魚の形になったというわけである。ただし，この擬似魚は，物理学的法則に従って，大きくなっているだけで，それが魚に似ていると判断するのは，われわれ人間の観察力にほかならない。あるいは，先入見といってよい。それが育児嚢であることに変わりはないのである。

擬似魚と見せるもうひとつの機能は，それがゆらゆら揺れて，あたかも魚が泳いでいるように見えるということである。それもまた，育児嚢としての機能のうちに収まっている。ゆらゆら揺れるのは，やはり育児嚢のなかにいる幼生に酸素を送りこんだり，幼生が放出された後に水中に浮かぶようにしたりする方向で育児嚢が進化しただけにすぎない。つまり，ランプシリスにとっては，擬似魚は，そのような目的に奉仕しているのではなく，繁殖のためにだけ，奉仕しているのである。

自然界を進化論的に観察するとき，人間は，しばしば，理解に苦しむ現象にぶつかる。ヘラジカの例がそれである。ヘラジカは，定向進化によって，自分で自分の絶滅の手段を作り出してしまった，というのである。

ヘーゲルの主と奴の弁証法ならともかく，自然界では進化の法則に反したことは生じない。力の法則の限界にまで,「不必要に」成長するヘラジカの大きな角は，結果から，現実から出発しないと，それがこの種の滅亡の原因ではないかと，考えてしまう間違いを犯す。この間違いは同時に進化論の否定につながっている。

それがなぜ間違いであるかというと，現にヘラジカは，大きな角を「なにかの役に立てて」繁殖していた，という現実をそれは，うまく説明することができないからである。そのうえ，この繁殖という結果から出発しないと，自然には,「不必要なもの」があるという間違った結論に行き着くからである。もし，自然界に不必要なものが「存在」するとすれば，自然は，必然性の鉄の法則に則って運営されていないことになり，ときどき，法則の軌道から逸脱し，偶然の支配下にはいるということになる。

もちろんここで登場するのは，超越神である。自然のほかに全能の神が存在するからこそ，その介入によって，必然性が破壊されるのである。近代的自然観は，偶然という名の超越的調整装置すなわち神を自然界からは，追放することによって成立している。この調整装置は，自然界の外にあるのではなく，ほかでもない，自然界それ自体の内部に存在しているのだから。

それゆえ，生命の変化と変遷に関する学説も，予断を排し，目的論を立てずに，現実そのもの，すなわち複雑性においてきわめて異なる無数の生命存在が現に生きて，繁栄している，という現実から出発しなければならない。このことから，生命体が具備する器官のすべてが必要性にもとづいて存在しているがゆえに，それらは，合理的かつ必然的である，と考えなければならない。とりもなおさず，このことは，自然を観察し，解釈する側から言えば，生命の変化と変遷は，いずれは，科学的論理によって解明することができる，ということを意味する。

一言で言えば，自然的現実は，合理的，理性的なのであって，信仰や超越神の存在を前提とするよう

な，非合理なものではない，ということである。おまけに，非合理なものは，われわれには，観測できない，ということもある。しばしば，寝ているときに見る夢が説明困難なのは，夢現象間の論理的結びつきが簡単には，わからないからである。もしも夢がまったくの非合理的なものであれば，そもそも人間は，夢を見ることができない，ということになる。ためしに，夢が非合理かどうか，検討してみればよい。夢の個々の材料は，すべて人間的であり，それゆえに理解可能な材料ばかりである。説明困難であるのは，おんどりがなぜハンス少年のペニスをつつきにくる必要があるのかである。つまり，因果関係が理解できないだけの話で，夢そのものは，すべて具体的事物でしかない。天馬ペガサスが本物の馬と本物の羽根とから成り立つが，問題になるのは，そして，夢が非合理だと錯覚されるのは，馬と羽根の結びつきが論理的に説明できないにすぎない。スピノザなら両者の結びつきを簡単に説明してくれる。馬が空を飛べると都合がよいと考える人間のみが天馬ペガサスを「夢見る」のである。別な欲望すなわち必要を感じている人間は，別な夢，たとえば，水中を自由に走り回る亀の背中に乗った夢を見るであろう。

さて，先ほどのヘラジカの滅亡に戻れば，まず，第一に生物界において「種の絶滅」というのは，むしろ日常茶飯事なのである。近年のDNAレベルの遺伝学の業績によると，生物の進化には，ほぼ無数と考えられるほどの失敗例の累積が必要なのである。したがって，外界の変化に対応できない種は，次々と滅んでいく。ヘラジカの滅亡の例もそのひとつにすぎない。第二にヘラジカの大きな角というのは，それが武器として，他の動物と戦うために進化してきたと解釈すると，あまりにも巨大になりすぎた角は，進化の法則に反しているように見える。というのも，体に比べてヘラジカの角は，異常に，バランスを欠くほど，大きいからである。これでは，定向進化説の有力な根拠となってしまう。しかし，自然界は定向進化説を許さない。ダーウィン流の適者生存の法則に，それが反しているからである。だとすると，ヘラジカの大角は，それだけで，或る目的にかなっていなければならないことになる。ヘラジカは，確かに種としては滅亡したが，それは，不必要に成長した角のせいではない。食料確保を中心とするヘラジカを巡る環境の変化にヘラジカが対応できなかったことが滅亡の原因だった。

それでは，ヘラジカの大角は，なんの役に立っていたのか?　自然は不必要なものを作らない。大角は，オスのメスに対するオス性の示威行為のために，つまりは種の繁殖そのもののために，発達してきたのである。

現実は理性的である

以上のように，進化論的現象のみならず，人間が外界のさまざまな現象ととらえようとするとききわめて大事なことは，目の前の事実というのは，形あるものであり，限定されており，閉鎖系であり，人間が理解できるものである，と考えること，すなわち，現実は，理性によって，解明することができると考えることである。逆にこれを自然界の立場から見ると，万物は，現実に存在するかぎりは，すべて合理的である，という命題に行き着く。

ヘーゲルは，『法哲学講義』のなかで，同じ立場に立って，次のようなことを言っている。そしてその発言は，ほとんど断固たる無神論者のものですらある。マルクスがかつて言ったように，ヘーゲルの場合，完全な唯物論が「転倒」しているのである。

「哲学は，理性的なものの根本を究めることであり，現在ある現実的なものを把握することである。それは，彼岸的なものを打ち立てることをつとめとしない。彼岸的なものがいったいどこにあるかは神様だけが知っている――それとも，じつは世の人はそれがどこにあるかをよく言うことができる。つまり一面的でからっぽな，理由づけばかりをやる思惟の誤謬のなかにあるのである[(22)]。」

たしかにこの表現は，現実弁護論と解釈される危険性を持っている。現実は，人間理性に的確に対応していると考えると，どのような現実でも，それを承認することと弁護することとは，ほんの数歩しか離れていない。ここを飛び越すかどうかは，弁護論の泥沼にはまりこむか否かの分かれ道である。

しかもヘーゲルは，或る意味で唯物論者でさえある。彼は，現実と理念（法則）とを比べて，はっきりとこう断定する――そしてその場合には，とりわけヘーゲルはスピノザ主義者である。

「法則は，行為しない。行為するのは，現実の人間である[(23)]。」

その場合の価値基準は，当然，主観的なもので，行為主体がどれほど真剣に法則の実現に努力（コナツス）したか，ということだけである。行為するのは人間だけではなくて，生物もそうである。いわゆる生命存在はすべて自らの永続と繁栄のために努力する存在である。ただ，人間の場合には，進化の過程で，行為を脳髄に反映し，逆に行為を脳髄から命令する独特の思考器官が発達を遂げただけなのである。

人類進化論註記

＊以下の聖書からの引用は，すべて日本聖書協会の新共同訳による。

（1）　この表記は本多勝一からの示唆による。

（2）　ブッシュ大統領の信仰行為は，公私の混同が甚だしく，合州国憲法および近代法における宗教と政治の完全分離の原則に，明らかに違反している。イラク戦争勝利のためにホワイトハウスで，ブッシュを励ます祈りを捧げた，ビリー・グレアムは，現在では，米合州国でもっとも影響力のあるテレビ説教師で，その中心的教義は，逐語霊感説にもとづく聖書の絶対化であり，きわめて原理主義的なものである。彼が組織する「ビリー・グレアム福音伝道協会」は，ブッシュ再選に大いに貢献したが，ブッシュはその見返りとして，大統領就任直後にナショナル・チャーチで，行なわれる記念ミサの筆頭説教師として，グレアムを指名した。グレアムは，「ブッシュ再選は，全能なる神のご加護と意志である」と説教した。もちろん，各宗派の代表者が集められているとはいえ，キリスト教会で大統領がミサを捧げ，グレアムの特異な説教に頭を垂れるというのは，たとえ歴代大統領の習慣になっているとはいえ，われわれの感覚からすれば，異常である。ちなみにグレアムの信条告白の第一番目に置かれているのは，次の聖書逐語霊感説に対する盲目的信仰である。

「聖書は，神の誤りなき言葉である。それは，神の神聖な，霊感を受けた言葉である。それは，最高かつ最終の権威である。」

さらに，父と子と聖霊が神においてひとつである，という三位一体の神を信仰することが強調され，イエス・キリストが聖霊によってみごもった処女マリアから誕生したこと，イエス・キリストが生涯，罪を犯さなかったのに，人類の罪を背負って十字架にかかったこと，そして，その後，復活し，天においてイエスは，仲保者・弁護者として神の右手に座っていること，まもなくイエス・キリストが地上に再臨することなどを信じなければならない，としたのち，最後に彼は，「現代的情報手段を駆使して，イエスの福音書を世界に広めること」をみずからの使命としている。まさに，ビリー・グレハムこそ，「現代のカルト的福音主義の頂点に立つ」説教師であり，「ラジオやテレビを使って，大勢の人に神による贖罪のよき知らせを宣べ伝える」（W.R.Martin:*The Kingdom of the Cults*，*Bethany Fellowship*，Minneapolis，1965，p.341.）宣教十字軍の戦士なのである。こうして，彼は，比較的早くからラジオで，「決断の時」と銘打った説教を行ない，現在では，毎朝のように，テレビに登場して，全国にその影響力を及ぼしている。

マックス・ヴェーバーは，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において，カルヴァン派の教義の特徴を，その非人間性に置いた。つまり，救済というのは，個人の魂のみにかかわる純粋私事だとしたのである。そこから，宣教の必然性は生まれない。現在の米国にヴェーバーが生きていたなら，新教のあまりの変貌に絶句したであろう。上記の信仰箇条といい，全人類の救済（世界宣教）への使命感といい，信者獲得への熱意といい，米国の福音主義宗派の教義は，カトリックの正統教義とまったく違いはない，と言っても言い過ぎではない。

（3）　Cf.,M.W.Davies:*Darwin and Fundamentalism*, Icon Books,UK,2000,p.6.

（4）　Michael Ruse:*Darwinism Defended,A Guide to the Evolution Controversies*, Addis on-Wesley Publishing Company, Massachusetts,1982,p.xi.

（5）　劫罰としての農業・牧畜労働という聖書の着想には，一面の真理がある。それは，社会進歩の結果ではなく，むしろ，狩猟・採取のエデンの園（繁栄は人口増をもたらす）で，人間は，食料を取り尽くしたのである。人口増と食糧難に困窮した人間は，とうとう採算の合わない，農業・牧畜労働に必然的に従事せざるを得なくなった。それは，二足歩行で，手を解放した人類の創造的発明ではなく，やむにやまれぬ事情があって（「必要は発明の母である」），労苦を背負わざるを得なくなったにすぎない。だから，人類永遠の希求は，この強制労働からの解放である。マーヴィン・ハリスの『ヒトはなぜヒトを食べたか』（Marvin Harris: *Cannibals and Kings, The Origins of Cultures*, Vintage Books, New York, 1977.）の或る章は，「エデンの園の殺人」と題されている。本書を読めば，「進歩」の観念がいかに実態とかけ離れているか，人類が必要もないのに「創造の才」を発揮して，社会進歩を達成する動物ではないことをよく理解できるであろう。

（6）　創世記において，農業・牧畜労働のうち，牧畜については，罰の種類として軽いというのは，大変興味ぶかい。なぜなら，神は，アベルが「羊の群れの中から肥えた初子を持って来た」ことを大いに喜んだのに対し，カインが「土の実り」を持ってきたことに，なぜか「激しく怒っ」たのである。つまり農業労働と牧畜労働とのあいだにも，優劣の差があるということである。

これには，二つの原因があると思われる。もとより，パレスティナの地は，牧畜には適しているが，小麦を育てる農業には不向きだった，という環境問題がある。しかも，牧畜の成果は，上質の蛋白質で，そのうえ，少量の摂取で十分な栄養がとれる。植物たとえば豆からの蛋白質の摂取で，牛からの蛋白質の摂取を代替しようと思えば，想像を絶する量の豆を食べなければならない。それよりも，牧草という植物を豊富に食べている牛や羊の肉を食べる方がきわめて合理的に栄養がとれる。しかも，

農業には，少量の産物に対して，広い土地が必要である。このように，牧畜の産物である肉は，人類にとって，きわめて採算のよい食料なのである。それに対して，肉に匹敵する価値を持つ「大地の産物」を神に捧げようと思えば，カインは，おそらく牛車数台分を用意しなければならなかっただろう。神が怒ったのは，神への崇敬の念を示すのに，カインは，けちん坊だったことによるのであるから，この神観は，農業と牧畜との価値観の差異を示していると考えられるのである。

もうひとつの理由は，牧畜の狩猟に対する接近度は，農業の採取に対する接近度にまさる，ということである。つまり，よりエデンの園に牧畜の方が近いということになるのである。この時代の牧畜は，牧草を追って移動していく方式がとられており，現代のように，狭い牧場に閉じこめて，家畜方式で，エサを与える，といった方式ではなかったことを想起しなければならない。後者の方式は，かぎりなく農業に近い。家畜は，自分で食料を確保するすべを持たない。家畜のエサは，人間が与えるのである。ペットの場合はいざ知らず，一頭の牛に，冬場も潤沢な食料を保証しようと思えば，莫大な牧草を夏のあいだに確保しておかなければならない。北海道の牧場主の苦労は，おそらくモンゴルの牧畜民の比ではない。この点を雄弁に証明する例がある。或る自治体が川の土手の雑草に業を煮やして，一匹の羊を土手に放し飼いにしたのである。この羊は，のべつ幕なく雑草を食べたから，あっという間に食糧不足に陥ったのである。そこで仕方なく人力で近隣の土手から雑草を刈り取って，羊に食べさせ，実験は見事に失敗した，というのである。筆者の体験でも，そしておそらくは，トーマス・モアの体験でも，イギリスの羊は，ヨークシャー・ランカシャー地方の広大な牧草地の牧草という牧草を食べ尽くしている。この地方の牧草地の広さは，尋常ではない。しかしながら，羊の食欲は，連綿とつづく小高い丘という丘にびっしりと羊が張り付いているほどのすさまじさである。

一方，農業は，はじめから，収穫が保証されてはいない。実りの時になってイナゴなどの害虫が襲ってくれば，もはや防ぎようがない。害虫，大雨，洪水，干ばつが神による背神的ユダヤの民への懲罰である，との記述は，聖書に満ちあふれている。農業は，その意味で，採算の合わない，成果の保証がない長時間および長期間労働だったのである。このシジポス的労働こそ，背教の民にふさわしい罰である。これを，人間の創造の才と社会の進歩の結果と呼べるだろうか。

（７）　Michael Ruse:*op.cit.*, p3.

（８）　邦訳，『種の起源』，八杉龍一訳，岩波文庫，上，362-364ページ。

（９）　邦訳，同書，上，364-365ページ。

（10）　邦訳，『人類の起原』，池田次郎，伊谷純一郎訳，『世界の名著39，ダーウィン』，中央公論社，所収，207-208ページ。

（11）　邦訳，同書，208ページ。

（12）　邦訳，同書，同ページ。

（13）　邦訳，同書，217ページ。

（14）　邦訳，同書，同ページ。

（15）　邦訳，同書，218ページ。

（16）　邦訳，同書，219ページ。

（17）　邦訳，同書，229ページ。

（18）　邦訳，同書，233-234ページ。

（19）　Christian René de Duve:*Vital Dust,Life as a Cosmic Imperative*,Basic Books,New York, 1995, pp.231-232.。邦訳，『生命の塵』，植田充実訳，翔泳社，361-362ページ。

（20）　これが無生命の世界になると，だれしもそこに価値判断を持ちこんだり，善悪観念を当てはめたりはしないであろう。極微の粒子は，無限小時間の持続しか持たない。それに比べて，太陽などの恒星の持続は，人間的基準からは，想像を絶するほどの長さを誇っている。しかし，この世の誰がいったい，ニュートリノと太陽とを比べて，太陽の持続の方に軍配をあげるだろうか。

（21）　以下の二例は，いずれもグールドが『ダーウィン以後』（*Ever Since Darwin*,1973.）で挙げているものである。

（22）　G.W.F.Hegel:*Grundlinien der Philosophie des Rechts*,《*Werke*》7, Suhrkamp, Frankfurt, 1970, S.24.邦訳，『法の哲学』，藤野渉，赤沢正敏訳，『世界の名著44，ヘーゲル』，中央公論社，所収，168ページ。

（23）　S.275.邦訳，同書，359ページ。